

一方、ラトヴィアとエストニア両国の相違を説明するというポイントに戻ると、実務政党の多数密集と少数分散という違いが政策の違いをもたらしているということは説得的とおもわれるものの、両国についてのケーススタディ部分を見ると、実務政党の数の多寡より、むしろ、政党の性質そのものの違いが大きく影響しているように読めた。ラトヴィアの企業家と結びついたクライアンテリズム政党と、エストニアのネオリベラル対社会保障重視のイデオロギー上の左右軸上に並び、固定化、安定化した政党システムでは、政党がマイノリティ政策において取りうる自由度が異なる。イデオロギー的左右軸と、ナショナリズムにかかわる意見の軸が重なっている可能性も考慮できよう。政党の性質と競合の性格が深くかかわる興味深い発見であり、応用可能性の高い論点であろう。この点は政党の数や密度とは異なり、ケース以外の方法で実証されていないのは残念だが、多様なメソッドを用いたアプローチゆえに拾い得たともいえよう。今後もこの研究がさらに発展していくことを期待したい。

比較政治・政治史（一般）

<評者 粕谷祐子>

対象 Fukuyama, Francis (2014) *Political Order and Political Decay: From the Industrial Revolution to the Globalization of Democracy*, Farrar, Straus and Giroux.

政治に関して、これほど根源的な問題を、これほど大きなスケールで描いた著作に、評者は初めて出会った。政治秩序の成立と衰退をテーマとする本書は、その姉妹編（第1巻）である Fukuyama (2011=2013) とあわせ、政治学の「新しい古典」というべき作品である。フクヤマはこれら2冊の刊行を主な理由に、政治学のノーベル賞と喩えられるヨハン・スクデ政治学賞を2015年にスウェーデンのヨハン・スクデ財団より授与されている。

第1巻、そして本書評がとりあげる第2巻に通底するテーマは、著者自身が喩えて言うように、「どのようにして『デンマーク』に辿りつくのか」という問題である（ここでのデンマークは自由民主主義体制が適切に機能している仮想国を意味する）。フクヤマの答えは、次の3つの制度がバランス良く存在する場合、である。すなわち、不偏不党な官僚制という意味での近代国家、法が権力者の恣意的な行動を抑制する状態である法の支配、そして、選挙と議会を中心とした、共同体構成員全体の要求を満たすため

の手続きである民主的アカウンタビリティ（以下では単に「アカウンタビリティ」とする）である。

第1巻では、人類の先史時代（霊長類時代）からフランス革命までという壮大なタイムスパンで上記3つの政治制度がどのように成立したのかを検討している。フクヤマによれば、近代国家は紀元前3世紀の中国を、法の支配は12世紀のカトリック教会を、そしてアカウンタビリティはイギリスの名誉革命をそれぞれ起源とする。

産業革命以後現在までを分析対象期間とする第2巻では、主に3つの論点が検討される。第1は、第1巻で検討した中国以外の地域での近代国家の成立である。西欧における近代国家形成の理由としては、官僚制の成立時期が普通選挙導入よりも先だったという「歴史の順序」の重要性をドイツや日本の事例を挙げながら指摘している。これに対し、途上国の多くで国家建設が進まない理由は、植民地時代に宗主国が国家機構を形成しようとしなかった点に求めている。第2の論点は、アカウンタビリティの制度が20世紀にヨーロッパを中心に広がった理由についてである。これに関しては、平等を望ましいものとみなす「アイデア」の普及と、そのアイデアを支持する中産階級の政治的影響力の増大が重要であったと著者は分析する。

第3の論点が、政治の衰退 (decay) についてである。フクヤマは政治の衰退という現象を、政治制度の硬直化と、近代国家がいったん形成された後で再び国家権限の一部エリートによる私有化が進む「再家産主義化」との2つで特徴づけている。そして政治の衰退がおこっている典型例が、最近のアメリカである。著者が「拒否権者による統治 (vetocracy)」と巧妙に名付けた、チェック・アンド・バランスの制度がゆきすぎた形で機能している点、そして、一般有権者ではなく莫大な資金力を持つロビー団体が政治を牛耳っている点が、最近のアメリカ政治における深刻な問題だと指摘する。

本書及び第1巻は一般読者にとって非常に読みやすい形で書かれており、すでに政治学者以外の読者層にも絶賛されている。その理由には、政治学だけでなく生物学、人類学、経済学、社会学、歴史学といった幅広い分野の古典と最新作を渉獵して主張を説得的に展開している点、両巻あわせて1200ページに及ぶ大著にもかかわらず主張が一貫していること、地域や時

代をまたいだ縦横無尽な比較、専門用語をわかりやすく説明しながら論を進めている点、無味乾燥な理論や数値の羅列ではなく興味深いエピソードを織り交ぜる配慮、などがあるといえる。

一般向けの本ではなく政治学の著作としての本書の貢献は何かと問われれば、評者が第1に挙げたいのが「政治発展論」への寄与である。1950年代・60年代のアメリカでの政治学を中心に流行した政治発展論は、70年代から最近に至るまで、多くの研究者が関心を持つテーマとはいえない状態にあった。その背景には、政治発展の概念が曖昧な形でしか定義されていなかったこと、1970年代以降流行したマイクロアプローチの合理的選択論に対し、巨視的（マクロ）アプローチをとる伝統的な政治発展論は分析上の親和性に欠けていたこと、政治発展を途上国の政治が西欧化することとほぼ同一視する文化的バイアスを抱えていたこと、などの理由がある。

本書及び第1巻の出版が、政治学において久しく途絶えていた感のある政治発展論というテーマを再興させる契機になるのではないかと評者は考える。著者が第1巻の冒頭で述べているとおり、これら2冊はサミュエル・ハンチントンが1968年に出版した『変革期社会の政治秩序』（Huntington 1968 = 1972）の増補改訂版という位置付けにある。政治発展を特徴づけるうえで制度を重視し、また、発展だけでなく衰退をも視野に入れている点で、フクヤマはハンチントンの系譜を汲んでいる。その一方で、ハンチントンが近代（19・20世紀）を対象としていたのに対し、分析のタイムスパンを先史時代にまで広げ、また現時点での最新の研究までをカバーしていることは、大幅な改善点である。さらに本書では、近代国家、法の支配、アカウンタビリティという3つの政治制度の変化をもって政治発展と定義しているが、これは実証分析とある程度親和性があり、今後、他の研究者による実証的な知見の積み重ねを可能にしている。

だが既存研究からの大幅改善の一方で、次のような曖昧さも残されている。第1に、近代国家、法の支配、アカウンタビリティという3点セットと自由民主主義体制の関係についてである。3点セットは政治秩序を構成する要素として位置付けられ、さらに、政治秩序が存在することで自由民主主義体制がうまく機能する、と繰り返し述べられている。言い換えると、3点セットの形成が政治秩序につながり、それがさらに自由民主主義体制の円滑な運営をもたらす、という定式化である。だが、法の支配とアカウ

ンタビリティが自由民主主義体制の2大構成要素と一般的にみなされていることをふまえると、この定式化では、説明するもの（説明変数）と説明したいもの（被説明変数）とが一部重複していることになる。もしもフクヤマが因果関係の特定を意図しているのであれば、論の立て方がトートロジーに陥っている可能性がある。第2に、「政治の衰退」の概念定義の曖昧さである。制度の硬直化と国家の再家産主義化の2つが政治の衰退を語る際のキーワードとなっているが、これらが政治の衰退の構成要素なのか、それとも要因なのかについては、そのどちらともとれる表記が散在している。また、政治の衰退が政治発展の延長線上にある概念であるならば、その定義も3点セットに対応した形でおこなうことが妥当であると評者には思えるが、現時点ではそうっていない。

とはいえこのような指摘は、本書の圧倒的な魅力に比べれば些細なものではない。政治秩序という、政治を研究する者にとって本質的に重要な問題に深い洞察を与える本書（と第1巻）は、ハンチントンの『変革期社会…』に代わる名著として今後数十年に亘り読み継がれることは間違いないだろう。

参考文献

- Fukuyama, Francis (2011) *Origins of Political Order: From Prehuman Times to the French Revolution*, Farrar, Straus and Giroux (『政治の起源：人類以前からフランス革命まで（上・下）』会田弘継訳、講談社、2013年）。
- Huntington, Samuel (1968) *Political Order in Changing Societies*, Yale University Press (『変革期社会の政治秩序』内山秀夫訳、サイマル出版会、1972年）。

国際関係論

<評者 山崎 望>

対象 遠藤誠治・遠藤乾編『シリーズ日本の安全保障1

安全保障とは何か』岩波書店、2014年

坂本義和『権力政治を超える道』岩波書店、2015年

近年、国際政治においてセキュリティをめぐる政治が前景化している。NATOとロシアの対立を背景とするウクライナ危機、台頭する中国と近隣諸国の緊張、中東諸国体制の液状化とテロの拡散をもたらすイスラム国の拡大など、一国による対応では解決が困難な問題群が噴出している。日本

日本政治学会 編

政治と教育

年報政治学2016 - I

木鐸社